天狗(てんぐ)のまな板石　　奈良県

むかし、ある高い山の頂上に天狗がすんでいました。

あるとき、村の男の人が山を歩いていました。ちょうど頂上まで来かかると、天狗があらわれて、

「おい、おれの碁(ご)の相手をしないか」とさそいました。緋衣(ひごろも)をまとった、赤い高い鼻の大きな天狗です。男は、恐ろしくてことわれず、碁の相手をしました。

天狗はとても強くて、男は負けてばかりです。天狗は、

「おまえ、弱いなあ。もうすこし強くなれよなあ」といいます。けれども、打っても打っても、男が負けます。負けると腹がたって、恐いのもわすれて、

「もう一番」

「もう一番」と、意地になって碁を打っていました。

けれども、そのうち、いちど家に帰ろうと思いました。

男が山を下(くだ)って家のそばまで帰ってくると、家におおぜいの人が集まっているのが見えました。そして、和尚さんが、鐘(かね)をコーンコーンとたたきながら、念仏(ねんぶつ)をあげています。男が、

「なにしてるんだ」とたずねると、家の人が、

「うちの主人が死んで、三十五日の法事をしています」といいながら出てきました。そして、ひょっと男の顔を見ると、死んだはずの主人ではありませんか。家の人は、びっくりして、

「あんた、いったいどうしたんだい」とさけびました。男は、まるできつねにつままれたようです。

「おれは、山へ行って、今まで天狗と碁打ってたんだぞ」

いつの間(ま)にやら、三十五日たってしまっていたのでした。

その山の頂上には、今でも、天狗が碁を打った石があります。まな板石といって、大きなまっ白い平たい石です。

村上郁再話

資料『子どもと家庭のための奈良の民話一』村上郁再話／京阪奈情報教育出版